



小さな研究所の陽当たりの良い中庭：杉山佳子先生を送る

著者	水谷 史男
雑誌名	明治学院大学社会学・社会福祉学研究 = The Meiji Gakuin sociology and social welfare review
巻	135
ページ	1-4
発行年	2011-03
URL	http://hdl.handle.net/10723/757

小さな研究所の陽当たりの良い中庭

—— 杉山佳子先生を送る

社会学部長 水谷史男

今年の夏は記録的な猛暑で、東京は厳しい熱帯夜と猛暑日が記録を更新して九月半ばまで続きました。

高齢者の熱中症と戸籍の抹消がない百歳以上の多数の人々の行方が、マス・メディアを騒がせた夏でした。江戸時代に生まれた人が、今も戸籍上生存しているというのは、あまりに途方もないので何かファンタジーのように愉快な気もしました。たまたまこの年に、社会学部長を務めている私は、杉山佳子先生のご退職にあたり、送る言葉を書かせていただくことになりました。

同じ学部の教員といっても社会学科に所属する私は、杉山先生との接点はほとんどないに等しいのです。杉山先生が社会学部社会福祉学科の専任教員として着任されたのは比較的最近でもあり、あえていえばヘボン館十階の研究室が隣の隣にあるので、ときどき偶然お会いしてご挨拶を交わす程度のお付き合いです。

しかし、実は（！）杉山先生と私はずいぶん昔から面識があるのです。それは今はパレットゾーンと呼ばれる施設の裏、学生のサークル棟になっている白金校舎の北側、旧社会学部附属研究所の懐かしい思い出に繋がっているのです、この場を借りて少しだけごくごくプライベートな昔のことを書かせていただきます。

当時、社会学部附属研究所（その頃は「附属」という字を使っていて、移転してから「付属」に統一したような記憶があります）は、日本館と呼ばれた五階建ての建物を通り抜けて、裏に出ると中庭を挟んで東側と北側に、二階建てのコンクリート住宅が四角い中庭に面してありました。その北側の建物は、左側に四月の健康診断のときだけ賑う健康相談所、右側が社会学部附属研究所になっていました。この建物は、どうみても子どもがいる家族が生活する集合住宅の間取りで、玄関を入ると廊下の両側に狭い部屋と流しが配置され、目の前の中庭には花壇にブランコまでありました。

詳しいことは知りませんが、おそらく都ホテルになる前の政治家藤山愛一郎の屋敷に隣接するここに、元からあった小さな二棟の集合住宅をそのまま大学が買い取って、健康相談所と附属研究所として使っていたのだと思います。大学の中でも、ここはなにか別天地で、早春の晴れた日や、晩秋の夕刻などは、研究所の南向きの会議室から前のヴェランダに暖かい陽光が当り、妙に静かでのどかな時間が流れていたものです。

私には、この建物の裏にある閉ざされた門も、何度かこっそりくぐり抜けて、そこから狭い坂を降っていくと都ホテル（以前は藤山邸が売却されて中華料理東明大飯店になっていました）の裏に出て、右に行くと国道に出る謎の抜け道でした。今でもこの隠し通路はあるみたいですが、大学紛争の時代は、ここから全共闘の連中がバリケードに出入りしたり機動隊の封鎖を突破する間道だったようです。

杉山佳子先生が、社会学部附属研究所相談・研究部門の研究員を務められていたのは、いま確認すると、一九八五年四月から一九九一年三月までの六年間だそうです。その前に、一九六五年、六六年の二年間は大学院生として在籍され、研究所でケースワークの実習をされたと記録にあります。私の記憶はかなり曖昧になってい

るのですが、私は確かにあの研究所の一階南側にあった日当たりの良い研究員と助手の部屋で、杉山先生と何度もお会いし言葉を交わした記憶があります。

というのは、私は大学院社会学専攻の博士課程の最後、教員として就職する前にこの附属研究所の研究員を一年間務めていたため、この部屋の片隅に机があつて座っていたのです。その時に同じ部屋の庭に面した窓際に四つ机が並んでいて、一番左が私。次に福祉の研究員、その隣にその後も長く相談部の助手を務められた斎藤舘さんと、その後松原現副学長と結婚されることになる助手の高木悦子さんがいらつしやいました。あれは確か、一九八二年ぐらいだったはずですから、お隣の席にいた福祉の研究員は別の方になるのですが、記憶があやしくなっています。杉山先生が研究員でいらつしやつた時期とは時間的にずれています。

今はもうだいたい昔のことなので、もしかするともう少し後のことだったのかもしれませんが、とにかく今は消滅してしまつたあの研究所のあの部屋で私は杉山先生に何度かお会いしているのです。その頃、もつと昔の学部時代、杉山先生が今春退職された松島浄先生と「社会学研究会」というサークルでご一緒されていたということも聞きました。その当時は、社会学部になる前で、文学部社会学科時代ですから社会学も社会福祉学も学生と教員は一緒だったんですね。

社会学部門の研究員だった私は、社会福祉のしかもケースワークの世界はまったく無知で、相談部のクライエントと面接する研究所の二階には立ち入り禁止だったこともあり、当時の所長加藤雄司先生や山崎美貴子先生が斎藤さんと一緒に、とても慎重繊細な心遣いでクライエントの方やご家族に真摯に向き合っておられるのを、ただ感心して眺めているだけでした。もうあれから三十年近くが経っているんですね。なんだか懐かしい思い出です。

杉山先生が社会学部の専任スタッフとして着任され、図らずも同僚という立場になってからは逆に昔ほどお話しする機会もなくなってしまいました。後輩の私が学部長として杉山先生をお送りすることになり、これも何かの縁でしょうか。

あの研究所の部屋から中庭を眺め、穏やかな午後の日差しを浴びて、錆びたブランコと草花がのどかな影を土の上に落としていた光景が浮かびます。杉山先生は私の記憶の中では三十代のあの頃と少しも変わっていません。まるで時間が止まっているように。どうかこれからもお元気で、その穏やかで清楚な佇まいを時々見せてください。